

望ましい幼児の姿



三木 安正

題をごらんになって、立派な系統的な幼児の姿とい

うものを取りあげて考えていくと思われるかもしれない
せん。文部省とか中央教育審議会とかで人間像とい
たものを考える時には、非のうちどころのない、どこ
からつっこまれてもいいというようなものをこしらえ
るわけですが、きわめてりっぱではあるが味がない、
あまり高すぎて手が届かないというような感じを抱か
せる人間像がしばしば見られます。

私がこれからお話ししようと思うのは、そのように
りっぱなものではなく、私自身が経験してきたことと
関連して、私自身の考えている幼児の望ましい姿につ
いてです。どういうよりどころで、どういう姿を描き
出すかということは、それぞれ違うと思うので、今日

お話ししようと思うのは、私の経験と私の考えですから、あまり
固くお考えにならないでいただきたいと思います。

異常児保育の研究

学生時代、私は知覚の研究をしていました。子どものことをし
たいとかねがね思っていたのですが、当時は大学の研究室とい
と知覚とか学習といった実験が主流で、それからはずれるとよい
研究ができないといった状態だったからです。そこで、卒業する
と、いよいよ子どものことをしようと思いましたが、そういう研
究所も職場もなく、たまたま医学部に脳研究所ができたので、誘
われて心理室の助手になりました。

そこでは研究とともに、脳の発達に障害のある人たちの相談部
が設けられましたので、そこへたずねてきたたくさんの子どもの

通じて、世の中にはいろいろの障害児がたくさんいるということを知って驚きました。そのことが、今まで私がそういう方面のことにたずさわるきっかけになったわけです。

たまたま昭和十三年に愛育研究所ができて、私はそこで、異常児研究室を受け持つことになりました。そこで研究の対象として、精神発達の遅れた子どもを集めた幼稚園のようなものを開いたのですが、はじめての試みですからどうしたらいいのかわかりません。そこでまず、子どもたちに何ができるのかということを見ることにしました。たとえば、小さいボールリングのおもちゃを使って、ボールをころがしてピンを倒すということをさせてみると、ボールがぶつかってピンが倒れるとたいの子どもは喜び、その他のピンを倒そうとする。発達が遅れていてもそこまではわかるのです。

そこで今度は、屋内用の木製のすべり台の上からボールをころがして、それがどのピンを倒すか、ということを見せてみると、大半の子どもは、ボールがすべり台をころがるということだけに興味が向いてしまつて、ころがり落ちたボールがさらにどのピンを倒すかということには関心がなくなつてしまつてしまうことがみられました。つまり、緊張の対象というか、関心の広がりというか、そういうものに限界があるのです。

さらに、すべり台の下に積木でトンネルを作つて、すべり台を

すべり落ちたボールがトンネルをくぐつて、どのピンを倒すか、ということになると、ほとんど全部の子どもが脱落してしまうのです。

さらに、トンネルの下に二つの分かれ道を作つて、どっちの道にころがりこんで、何色のピンを倒すか、ということになると、変化する条件に次々と対応していくだけの能力を必要とするわけで、ある程度水準以上の知能を要します。

こうしてどれだけの仕事ができるか、どういう遊びが理解できるかということを通して、知的障害の程度がわかるのです。その程度を捕えた上で、それを動かしていくためには何を与えたらいいだろうかということが出発になるのではないかと思ひました。

たとえば、粘土でお団子を作る、というような仕事をさせてみる。あれはなかなかむずかしいもので、粘土を掌において、両手を水平に動かさなければならぬが、その水平に動かすということがむずかしいので、丸くならないでこぼこになるか、ひものように長くなつてしまうのが多い。そこで、お団子作りを訓練してみようと思つた。そのためにはできたお団子にどういう関心があるだろうか、ということが問題になつてくる。お団子を二つ重ねると、普通の子どもならそれを雪だるまとか人形だとかいふふうに見て、それから遊びが発展すると思うのですが、知能の遅れた子どもは、お団子を重ねるといふことに意味を与えて、遊び

に使うという働きが弱い。そういう働きができなければ、喜んでお団子を作らないし、技能的な訓練もできないわけです。そこでお団子の塊に何らかの意味を与えなければならぬのではないかとこのことを考えました。

当時は戦争が始まった頃で、子どもたちの関心は兵隊さんになりました。それで、私は、ボール紙で兵隊さんの帽子を作り、お団子の上にかぶせてみました。すると、子どもたちの多くは、想像力が働き兵隊さんだということになりました。そこで、今度は、兵隊さんをたくさん作って並べようとか、むこうとこっちに分けて戦争させようということになり、団子をたくさん作ることに精を出すようになり、お団子作りがだんだん上手になる、といったことが見られたのです。また、その子どもたちは絵を描かせようとしても、まだ形を成していないで、くしゃくしゃの線を描くだけだったので、一定の枠の中を塗るといってもさせなければならぬと思います、日の丸とか、葉っぱの形の中をぬらせるということをさせてみました、それもあまり興味が無い。そこでひよいと思いついて、タライに水を入れ、葉っぱを切り抜いたのを水の上に浮かべてみました。すると葉っぱが水に浮いたということが非常におもしろくて、もっと葉っぱを作ろうということになり、輪郭の中をぬりつぶすという練習が少し進みました。

こういつたことから、意欲のない者に意欲をおこさせるために

レディネスを高めるとか、仕事に意味を付与するとかいうことについて、いろいろと考えてみる機会があったわけです。そして、子どもたちの行動を見る場合、彼らがそれにどういう意味づけをしているかを考える必要性を非常に強く感じたのです。ただ教えればやれるようになるだろうというのは、普通の子どもなら期待できますが、それは既に彼らには物がどういふふうに使われるか、どういふことをするとき何が入用かというつながりがわかっているのであり、そうした意味づけのあるものに対して適当な材料を与えていくということが、それを伸ばすことになり、組織化することになるのです。人間の精神の働きを伸ばしていくにはどうすればよいかということを考えていくには、それぞれの行動の意味というものを考えていかなければならないと思うのです。

新入園児の問題行動

その後私が愛育研究所にいた頃、保育問題研究会という集りで問題の子どもをテーマにしていたので、新入園児たちがどういふことで先生を手こずらせているか、それがいつごろ解消していくかということ、毎日、記録に出かけていったことがあります。

その頃は、入園早々は、付き添いから離れない、離すとなかなか泣き止まないといった子どもがずいぶんいました。そうした問題行動はたいいてい二週間ぐらいでおさまるのですが、それ以上長く

つづく子には問題児とされるものが多かったようです。このように集団の中へ入っていくプロセスに問題があるわけで、それがその後集団の中でどんな影響を受けてどう変わっていくだろうか、というところに教育の働きを考えることができるので、こうしたところに幼児教育の核心にふれるものがあると考え、ずっと関心を持ってきました。

農村幼児の保育

戦前は農村の乳幼児の死亡率が高かったので、どうやってそれを引き下げるかということがわれわれのいた愛育研究所の大きな課題でした。それに私たちもいろいろな形で協力したので。

その頃、神奈川県の高部屋村で小学校新入生の学級編成などの参考にするため知能検査を頼まれて、二年間ほど出掛けました。

その結果は農村の子どもの知能指数の中心は七五位なので、これには大変びっくりしました。当時都会の幼稚園だと一〇位が中心なので、七五というと精薄に近いわけです。そこで農村の子どもの知能検査の結果がこんなに低いのはなぜか、ということに疑問を持ったのです。

それにはいろいろ考えられますが、第一に農村の子どもは頭が弱いといえるかですが、そうは考えられない。第二には、知能検査そのものが農村の子どもたちに不利にできている、問題の作り

方においてそういう差があるのではないか。第三には、検査に必ずる応じ方が農村の子どもは大変まずいのではないか。第四には、農村は文化的、教育的環境が悪いために知能検査の結果も悪いのではないか。このようにいろいろ考えられたので、それを試してみたいと思ひ、その村の村長さんと話し合った結果、村に常設保育所を作ることになりました。

保健館という建物の一室を借りるので、せいぜい三〇人位しか入れないのに、毎年就学する子どもたちは約一〇〇人。それで、研究的には、半分を一年間保育所に通わせ、半分は通わせないで比較すれば結果が一番はっきり出てくるのですが、それでは教育的に不公平ではないかと思ひ、三部制にして一か月交代で順ぐりに三つのグループを保育することにしたのですが、その間に農繁期保育があるので、子どもたちは一年間に五回位とぎれとぎれに保育所にくるといった変なものになりました。しかし、保育をはじめの前と後とを比較した結果、知能指数では大体二〇位があつたのです。結局、農村の子どもは素質が悪いというわけではなく、やはり、教育的、文化的環境というものに恵まれておらず、従って対人関係も伸びていないのだろうと思われました。

観察していて私が強く感じたことは、戦前の農村の子どもは、おとなに対して非常に警戒心を持っているということでした。というの、農村では子どもはみそっかすとして扱われ、一人前に

人格を認められていない。欲しいものをねだってもいいかげんにあしらわれてしまう。あまりしつこくいうとどなられたり、なぐられたりしてそれでおしまいになる。そんなわけで、おとなに対して不信感を抱くようになるのではないかと感じました。そこで保母さんと相談して、やっていいことと悪いことをはっきり決める。いいと思ったら、少しぐらい迷惑をこうむってもやらせる、いけないと思ったら、絶対やらせない、ということにした。すると、だんだん先生のいうことは信用がおけるといふふうになっていき、自分たちのいうことを取り入れてくれる人がいるということとで、先生になついてくるようになった。

それまで閉ざされていた心が、だんだんに開かれ、積極性が増してきた。一番変化したのはその積極性でした。子どもたちをどういふふうに認めて伸ばしていくか、そうしたことが子どもの心を育てるのに大きな影響がある。その心の窓を開かせて、人と接触させ、互いに影響し合うようにする。それが精神的なものを伸ばしていく根本であるということが、考えられたわけなのです。

集団疎開保育の経験

次に別の経験として、これは終戦すこし前のことです。昭和一九年春に愛育研究所ではその附属施設である二つの保育所の子どもたちをつれて、埼玉県のお寺に集団疎開をしました。子どもた

ち二五人位に、先生五、六人位といった状態で、食糧を得るという心配にも追われ、先生の手が子どもたちにまわらず、私が関係した昭和十九年の秋ごろには、子どもたちはしょんぼりしてホームシックにかかっていました。

そこで、先生たちと相談して子どもたちのお母さん代りになる先生をきめました。つまり、普通なら十人の子どもを二人の先生が交代でみるというのに対して、一人の先生は四六時中五人の子どもの世話をするという考え方です。実際には各々の先生が四六時中みていられますからその時は隣りの先生にたのんで他の仕事をするという工合にしています。先生は自分のうけもちの五人の子どもと他の先生のうけもちの子とを区別してあつかう、えこひいきをしてあつかうという気持でやろうというわけです。

その考え方の根柢は、幼稚園や保育所では、先生はえこひいきをしないで、組全体の子どもを皆平等に扱うということが基本的な観念になっている。ところが家庭では、親は自分の子どものことだけを考える。親というものはえこひいきの代表である。平常の子どもたちが家庭から保育所に通っている時には、保育所では三十人の中の一人として扱われても、家では親を独占できる。そういう二つの場面があるわけだが、集団疎開だとそうはいかない。朝から晩まで保育所という生活、おとなを独占できない。そこで子どもたちは、頼るものがなくて、不安定になって

いくのではないか、ということを考えてのです。

その結果は、何となく子どもたちに安定感が生まれたように感じられてきました。観察的にそういうことが見られたわけです。

これを今考えると、大変おもしろい気がします。というのは、戦後になっていわゆるホスピタリズムの研究というのが出てきたし、近頃は両親が共働きをしているための鍵っ子の問題や乳児保育の問題が盛んに論じられるようになってきました。ソ連ではかつては赤ん坊の時から乳児院に預け、親から離すことが教育的にもいいかのようにいわれていたのが、最近ではだんだんと、子どもは親の手もとで育てる、育児期間中は親に長期の休暇を与えて子どもを育てさせる、そして子どもが大きくなったら職場に復帰できるようにする、そういう考え方に変わってきています。

子どもが赤ん坊からおとなへと成長していく段階では、自立とか社会化とかいうことがいわれるが、反面からみると、人間は何かに依存しながら成長していく、その依存の対象や依存のしかたが変わっていくといえると思います。赤ん坊の時は母親にすっかり依存しているのが、三、四歳になると身の回りのことは自分でできるようになる。そして今度は仲間を求め仲間に依存していくようになる。仲間との生活をしないと発達しない面があります。

たとえば言語の発達です。また、それに関連するいろいろな思考の発達です。つまり客観的な思考というものは仲間との社会生活

に入っていないか伸びていかないものといえます。

すなわちそれぞれの段階でそれぞれの者にうまく依存していくことができるのが、社会性の発展だということもできます。自立性と依存性とは正反対のこのように受けとられやすいが、本当は自立性というものは、結局はいろいろなものに依存するのが上手になってきて、自分を生かす領域が広くなっていくことだともいえるのです。

こういうことを考えてみると、乳児院、保育所、幼稚園の中で子どもたちが、何に依存し、どういうふうにな手が上手になっていくかということが個人を育てていくということの中核的な問題になってくるのではないかと思います。先の集団疎開で経験したことは、親に対する依存性と、集団社会への依存性というものを考えた場合、一方が欠けたために一方もうまくいかないというような事例として考えてみることができます。ホスピタリズムの問題などと合わせて考えると、今度は保育所とか幼稚園とかいうものの教育の場としての働きがどこにあるのか、ということがだんだんつかまえられるかと思われれます。

幼稚園と問題児

家庭における不適切な扱いのために、うまく集団生活に適應できないで、小学校へ入る時に、既にハンディキャップを持ってし

まっているという子どもがかなりあります。そういう子どもを幼稚園時代に何とかして、直してあげ、みんなと肩を並べて入学できるようにするということも、幼稚園の大事な使命であると思います。幼稚園の先生の中には、そういう子どもを問題児扱いして極端に言えば邪魔者になっている方がないといえませんが。

しかし、私は、そういう子どもこそ、さきぎき小学校、中学校と教育を受けていくのに困らないように、幼稚園の段階で直しておかなければならないと考えるのです。それは主として対人関係の問題ですから対人関係をうまく調整できるように指導していくようにすることが、中心になってきます。ある子どもが、落ち着きがなくて困るから、おしゃべりで困るからといって、その子どもだけをとり出して直すという考えではなく、そうした問題はみんなの仲間に入れないから現われてくるのではないか、みんなの仲間に入らなく入ることによってそういう症状が消えていくのではないか、というような考え方をしてみたいと、思っています。

私が教育研修所にいたころ発足させ、今では私立幼稚園として独立している白金幼稚園では、入園考査をする場合に、自由な場面での遊びと、設定した競技的場面での遊びの両方を観察し、その結果、社会的な発達がうまくいっていない方から順に採る、といった方法をずっと続けています。定員オーバーのため誰かが落とされなければならないのなら、幼児教育を最も必要とする子ど

もから入れようではないかという考え方からです。

このような考え方だと、子どもたちを指導していくのに、ねらいがはっきりしているわけで、指導をしていく間の問題の所在、それを解決していくための方法というものが、だんだんと積み上げられていきます。

白金幼稚園には、中流家庭の子弟が多く、教育ママ的な色彩もかなり濃いと思われ、自分の子どもが一番にならなければと気負っている親も多いようです。それと反対に、下積みの勤労者階級の多い保育園では、子どもたちに積極的な意欲がなく、抑えつけられてしまっているようで、自分を主張し、自分の考えを表現していくこうとする子どもたちが少ないようです。従ってここでは、もっと自己主張ができるよう指導し、意欲をおこさせ、向上心を持たさなければ、いつまでたっても下積みの生活から浮かび上がれないのではないかと心配されます。

このように、幼稚園でも、保育所でも、階層や地域環境の相異によって、子どもたちの性格を方向づけるのに重要な影響を及ぼしているものがあるわけです。その子どもたちを見、その親たちを見て、将来子どもたちがどんな人になっていくだろうか、ということを考えることから、望ましい幼児の姿はどうあるべきかということができます。単によいことばかりならべた徳目主義の人間像では指導のねらいがはっきりしません。現在目の前にいる

子どものどういふ点が教育的に具合が悪いのか、それはどういふふうにするれば直していけるのか、ということをも具体的に考えようとするのが、われわれの課題なのです。これから私が述べようとすることは、そういう背景に立っているのです。

望ましい幼児の姿

人間には、むろん発達段階というものが考えられるが、それはいろいろな条件によって変えられることもあるわけです。近ごろは発達加速現象、いわゆるアクセレーションの現象といつて、昔よりは早くからいろいろなことができるようになってきています。

そのため、小学校入学の時期を早めたらどうか、幼稚園を義務制にしたらどうか、というようなことも問題にされてきています。しかし、アクセレーションの現象の質的な面については十分には研究されておらず、身長は伸びていても、体力的にはどうか、いろいろな知識は増えていても果たして知的な働きの質的な面も高まっているのかどうかということは、まだ明らかにされていません。従つて、入学の時期を早めるということについては、現象面でみられることだけを根拠にして考えるのでは危険だといえます。また、そういった発達加速現象が、人格形成というものにどういふふうに影響しているかということはむずかしい問

題です。なぜなら、これは環境の影響、これは素質というように分けて考えることが実際問題としては困難だからです。

その点で比較的純粋に研究できるのは、双生児研究で、一卵性双生児をちがった環境で育ててみるのができれば、環境の影響がとりだして見られるわけです。それはともかく性格形成に及ぼす環境の影響ということで、子どもをとりまく人間関係というのは、もっと注目していいと思います。

すなわち、親の子どもを見る目、子どもに期待する期待のしかた、社会の子どもを見る目、そういったものが、教育的な影響を与えるわけです。そして、それらの多くは、教育的にはマイナスの影響力をもっているようです。

文部省の指導要領などによると、どれもりっぱなことが書いてありますが、現実に子どもを扱ってみるとなかなかそのようにはいきません。したがって高いねらいはねらいとして、実際には自分の幼稚園におろしてくるときはそこでの子どもの姿、望ましい発達を阻害しているかということをお察し、それを是正していくということに重点を置いて指導していくようにしないと、しっかりと地についた教育にはならないと思うのです。

あれもしなければいけない、これもしなければいけない、という総花主義では、深くつつこんだ教育的な指導はできない。大体教育者というのは教えることに「落ち」がないかということをし

きりに気にされるが、「落ち」がないということより「すじ」がないということの方が困ることだと私は思います。従って、多少の「落ち」があっても、すじを通すことの方が大事なので、こまかい「落ち」はあとから修正していけばいいので、すじがなければ指導の方向が定められないわけです。そしていつも中途半端に終わっているから、直すところもわからないというようになってしまいます。そこでつぎに太筋となるものを考えてみましょう。

持っている力を伸ばす

そこでまず、発達の面からいえば、持っている力ができるだけよく育っていくように、まわりで配慮していくことがあげられます。人は生まれながらにして一四〇〜一五〇億もの脳細胞を持っているが、はじめのうちはその一粒一粒は未成熟で、だんだんに発育していきます。と同時に、いろいろな経験をするることによって、細胞との間につながりができ体制化してくる。そしてこういう時にはこういう反応をするというパターンができていく。外界のものの認知ができ、思考の働きが進んでいきます。そして一四〇億ものトランジスタ全部が働くようになる、それは無限と思われるような働きをするわけです。しかしその配線がうまくいっていないければ、いくらたくさんトランジスタがあってもそれは働かないわけです。既成の知識をつめこむというだけの

教え方では、うまい配線をすることはできないわけで、新しい考えをうみだす力は養われないでしょう。

上述のように人間というものは無限に近いところまで伸びていく可能性をもっておりますが、その個々の細胞の成熟してくるその内容となるものを求め、それでいろいろなことをやってみたい、それを試してみたいという本能的な働きを持っていると私は思います。

能力のある人ほどそのぎりぎりの力を試してみたいという欲求が強く、そのために記録に挑戦します。子どもの場合は、個々の細胞の成熟がすすむので、その力を試してみたいという欲求も強いといえると思います。走る力の成長のよい人は、一〇〇メートル走るのに、十分の何秒でも縮めてみたいと思うのと同じように、脳細胞の働きの盛んな人は強い知識欲を持つといえると思います。その知識欲を満足させるものがあれば、さらに高いものを求めるのです。そこを考えないで、知識をつめこむというのは、むしろ知識欲を減退させてしまう結果になると思います。

人間関係を通して自我を育てる

教育といえは知的発達を伸ばすことと情操を豊かにすることがならんで考えられるが、それは本来は切りはなすことはできないものと思います。知的というかと数学や理科、社会など、情操とい

うと音楽とか図工と考える方がいるかもしれませんが、情操というものの基礎には精神的な安定と、真なるもの善なるもの美なるものを求めていく欲求がなければなりません。ただ歌をうたわせたり、絵をかかせたりしても情操を高めることにはならないでしょう。基礎ができていなければ、いろいろやらせてみたことが本当の経験にはならないのです。

そこでさらに、精神的な安定ということの基礎は何かと考えてみると、それは人間関係がうまくいっていることだと思います。

赤ん坊の時は何から何まで親に頼っているが、だんだんと自分でいろいろのことができるようになると、自分でやってみたいということになります。それで親のいうことに直ちに「ハイ」といわないで「イヤ」というようになるので、普通これを反抗期とよんでいます。自分でやりたいといっているのが主なので、特に反抗しようとして「イヤ」といっているのではないのですから、私はむしろ力だめし期という方がいいと思っています。力だめしをするには当然失敗もありますが、それをうまく勇気づけていくことが指導ということになります。

このように、まず親との関係において子どもの自我が発達するので、十分力だめしをさせてくれる親か、反抗として扱って、これを押えようとする親かということによって、子どものパーソナリティ形成の方向は変わってしまいます。親が子どもの将来に

何を期待しているか、それをどのように現わすかということが子どもの自我の形成に非常に関連してきます。自分の子どもはいつも一番にならなくてはいけないと思っような親の子どもは、人のことを考えるよりもまず自分のことを、という傾向になりやすいと思います。

さらに成長すると、親子関係、家庭関係だけでは、子どもの精神発達を進めていくのに足りなくなってしまう、土俵が狭くなって、十分に相撲がとれなくなってくる。もっと広い場に出て、いろいろな人に接しなければ、精神発達を豊かに伸ばしていくことができなくなってくるのです。

子どもというのは四、五歳になると必ず想像上の友を持つようになります。それがなければ、ままごと遊びというようなものはつまらないものになってしまいます。子どもがままごとを好むのは、そうした想像上の友だちをいろいろな動きまわらせることができるからだと思います。二人でままごとをしているようでも、今お父さんは会社へいっている、お母さんは仕事をしているというような設定があるのです。それで実際の友だちだけが得られない場合には、想像上の友だちばかり増えてしまうことがあります。次にあげるのは私が戦前に経験した例ですが、比較のお金持な家の一人娘で、近所の環境がよくないというので五歳になるまでどこにも出さず、親と女中さんが子どもの相手をしていました。

遊ぶ時には友だちがいらないから想像上の友だちをだんだん作って
いって、しまいはそれが十七人にもなってしまったのです。そ
の十七人は一人一人イメージがはっきりしており、名前もつけ、
それぞれの顔形が目の前に浮かぶようになっていました。遊ぶ時
は十七人分の道具を用意し、外に出てバスに乗り降りする時には
十七人が乗り降りしてからでない自分も乗り降りしないといっ
たほどになってしまいが大変困るようになったのです。そんなわけ
で相談にみえたのですが、その解決法は至極簡単で、幼稚園に通
わせるようにすすめたところ二、三か月ですっかり、直ったので
す。この事例は、発達のためにはいかに友だちが必要かというこ
とを現わしているといえるでしょう。

実際の友だちがなく想像上の友だちばかりですと、その友だち
は自分のいいなりになるので、自己抑制の力が育たずわがままが
ひどくなります。実際の友だちだとそれぞれに意見を持っている
ので、こちらのいう通りにはなりません。三、四歳の時期に必要
なことは、自分とは違った他人が存在し、それがそれぞれに意
志を持ち、自他の意志を疎通させなければ、一緒に生活はできな
い、そういうことがわかってくることだと思います。

また意志を疎通させるためにはことばが発達しなければなりま
せんが、親と子の間なら、「お水」といえば水を持ってきてくれ
るが、子ども同士の間だと、「お水」といっても水がどうしたの

かわからない。そこで水を飲みたいとか、水をまきたいとか、い
ろいろ動詞を使用するようになります。そういうことから、他人
と接するためには、ものを客観的に表現するという必要がおこっ
てくるわけです。ことばを発達させるためには他人との接触がな
ければならないしことばを使う必要性を感じなければなりません。

さらに、集団で何かをしていく場合には、お互いに意志をコン
トロールしていかなければならないし、そこに約束とか道徳とか
いうものが生まれてくる。善いこととか悪いこととかは既に昔か
ら決まっていることだから、それを教えさえすればいいと考える
人もいるが、私はそうは思いません。善いことや悪いことはその
理由が納得されていかなければならないので、それを実際の場面
で体験していくことが必要です。

みんなが協同で遊ぶためには、だれか一人が変なことをすると
みんなが困る、そういう場面におくことよって、ルールの必要
を感じさせ、それを理解していくようになるのです。子どもは、
仲間の生活の中に依存したいという強い欲求を持っている。集団
生活への強い欲求があるために、したいこともがまんしたり、順
番を待ったりということができるわけなのです。そういう時期に
幼稚園の教育期間が当たっているということを十分に考えておか
なければならぬと思います。

人間関係が進んでいくと協力というような関係もできてきます

が、協力とは何かというと、自分の力のたりないところは相手から借り、相手が不足しているところは力をかして、お互いに補いあつていくことだと考えられますが、その前提には、自分の力と相手の力とを比べることができるようにならなければならない。また、自分の力と相手の力とを比べるのに最もよい機会は喧嘩ですが、同時に一人で何かするより相手と一緒にした方が楽しいし、より多くのことができるという、経験も必要です。そこで集団生活とか遊びとかを通して他人と自分との関係を持たせ、その関係をうまく調整できるように指導して、その中に自分が安定した座をもてるようにしていくことがたいせつなことになります。それが得られれば情緒的に安定し、その心のゆとりと精神的な欲求によって情操というものが高められるのだと私は考えたいのです。

そこで、知的なものと情操的なものとの根底にあると考えられる人間関係の発達というものを考えて、どのようにすればそれが望ましい方向に育つか、すなわち集団生活を通し、人間関係を通して個人を育てていくことを考えるのが幼児教育の中心的課題であると思います。そういう視点に立つと、逆の方から問題の子どもという者のことを考えることが大変役にたつてきます。というのは彼らを見てみるとどうして望ましい人間的成長がうまくいかないか、ということを示しているからです。また、その問題の子どもを指導して望ましい方向に近づけることができれば、その指

導のプロセスを覚えてくれることにもなります。問題の子どもといってもいろいろな場合がありますが、それはいろいろな意味で自分が何をすればいいかがよくわからない状態におかれている子どもといつてもいいと思います。

たとえば、知的な発達が遅れている子どもは、まわりの者から要求される問題はむずかしすぎて、どうしていいかわからない。親が過保護の場合には、自分でできることまで親がしてくれるから子どもは、することがなくて何をしたいかわからない。早く字が読めるようになれば、早く勘定ができるようになれば、とむずかしいことはばかり要求する反面では靴をはいたりするようなやさしいことはみな親がしてしまふ。それで自分の力がどれだけあるかわからなくなりますが、ちょっとむずかしいことであつと、逃げだすという性格になってしまう。一つのことを終りまでなしとげるといふことがなく、あちこちとかじつて歩くというようなことをするから、落ち着きというものがなくなります。

こういうことを直していくには、自分には何ができるんだ、何をしていけばいいんだということをわからせていけばいいのです。それをわからせるには、子どもが求めているものによつとあつたものを与えていくことで、しつてはそういうものだと私は思っています。立つて歩けるようになったら、歩きよいようにさせる。匙をつかえるようになったら一人で食べさせるといふよ

うにすることです。そういうものが累積されて、それぞれの時期に自分には何ができるかということがわかることが基本的なこと
で、それがわかっていたら皆の中に入っても自分の役割を果たして
いけるということになり、それが情緒的な安定をもたらし、自
我を育てていくと思えます。

受容と表現の力を伸ばす

そういうことが基礎になって、さらに自分の世界を広げていこ
うという欲求が強まってきました。その欲求のあらわれは外界事象
を受け入れ、理解し、また自分の内に育ってきたものを表現し、
他人にも認めてもらうという働きがさかんになってきます。表現
が上手になれば受け取る方も豊かになるといえることができます。
表
現
い
ま
す。

幼稚園指導要領の社会的領域には、社会的なものとは社会科的
なものとは含まれるわけですが、社会的なものとは人間関係が
主になるもので、社会科的なものとは外部の社会に対する理解と
働きかけです。それと結びつくものは自然であり、この両者をわ
たしどもは外界と申したわけです。そしてこれを表現したり受容
したりする手段になるものが、言語であったり、音楽であったり
絵画製作であったりするわけです。

さきに自分はどういうことができるんだということを自覚させ

ることが大切だと申しましたが、これこれのことができる頭の中
で思っていただけではだめなので、それを実際に現わしてみ
ることが試しになるわけです。それが絵画製作や音楽や言語など
による表現活動となったり集団の中でリーダーになるとか役割を果
たすというような社会的な活動として具体的に経験されていけば
いいのだと思います。

望ましい幼児の姿といっても、私はむずかしいことを考えてい
るわけではなくて、それぞれの子どもが十分に力を発揮し、よい
集団生活に入っているようになればよい性格ができていくと思
っています。しかし、幼児にとつて社会生活は未経験の世界であ
り、そこに入っていくには修練がいりますし、入りそこなう子ど
もも少なくないのですが、そういうところを一步一步進むのに
手助けをし、自分というものが、皆の中でどういう位置づけを持
ち、何をすればいいんだということがわかるようにさせれば、小
学校や中学校へいって伸びる地盤ができると思います。

幼稚園教育の成果というものは、どこでどう測れるかは大変む
ずかしく、せっかく幼稚園の段階ではよくても小学校の段階でそ
の芽を摘まれてしまうこともあるし、幼稚園では伸びなかったも
のが小学校でぐっと伸びたということもありましょう。結局望ま
しい姿というのは、今までいったようなことであると思います。

何でもいうことをよくきき、何でも上手にできるという、良い子

主義では、子どもの中に何が育っているのかを考えない教育になりません。いつも先生にほめられるような行動をしているだけでは何が育つでしょうか。けんかはしてはいけないとだけ思いこんでいて、ぶたれてもだままっているというのでは子どもらしくありません。前に申しましたように、けんかは自他の力を知るといふ点で子どもにとって大事な機会であり、それをどう処理するかを考えさせる重要な過程になると思います。そういうことを教育的に利用しなければいけないのです。良い子主義の教育では、けんかをしてはいけません、けんか両成敗などと扱われ、それでは行動に対する判断力が養えないと思います。

評価の重要性

そこで私は、幼児教育が今後発展していくためには、幼児教育の評価方法をもっと研究する必要があると思います。それは、決して、ある標準をこしらえてそこまで達したら何点というような成績の評価ではなく、子どもたちがあることをするのにどういう手順でそこまでいったか、どういう考え方でそういうことをしたか、というプロセスが望ましいかどうか、それが将来伸びるものであるかどうか、そういう評価のできる方法でなくてはなりません。と同時に、評価というものは指導した結果の評価ですから、指導と無関係にでなく、どういう指導をした時はどういふ点がど

うなったか、ということが評価されなくてはなりません。

そういうことを考える上にも、子どもたちはどういふ環境の下でどういう行動をとるようになってきたかという事実をよくみていくことが必要で、また日常の指導では先生方は何らかのねらいをもって子どもたちを扱っているわけですから、それに対して子どもたちの行動がどういふ方向に伸びているかということを注意してみることが大切なのです。そうすると、先生方の指導といふものが、子どもたちからどう評価されているかということもわかります。自分の思うようになっていなければ指導法を変えていく、それが評価の役目で、評価ということは自分たちのしていることへの反省であるともいえます。

ある指導の成果を評価するためにはその指導のねらいがはっきりしていなければなりません。そのねらいをはっきりしていく努力をつづけていけば望ましい姿は何かということになるのです。

幼児期というのは、人間形成の根底となるものを培う時期でありますから、目前の行動についてこうでなければいけないとか、これができなければいけないということを並べるよりも、将来いろいろなものを受け入れたり、いろいろなものに働きかけたりするそのエネルギーを養うことが必要だという立場で、望ましい幼児の姿といふものについて、私の経験をもとにして意見を述べさせていただきます。(日本幼稚園協会主催・幼児教育講習会講演より)(東京大学)